

佐藤幸人編

「21世紀アジア諸国の人文社会科学における研究評価制度とその影響」

調査報告書 アジア経済研究所 2018年

第4章

台湾におけるSSCIに基づく研究評価制度に対する批判的研究 ——Chuing Prudence Chou ed. *The SSCI Syndrome in Higher Education: A Local or Global Phenomenon* を読む——

佐藤 幸人

要約：

本稿は Chuing Prudence Chou ed. *The SSCI Syndrome in Higher Education: A Local or Global Phenomenon* (周祝瑛編『高等教育におけるSSCI シンドローム——ローカルあるいはグローバルな現象——』) のレビューである。『高等教育におけるSSCI シンドローム』には、台湾の人文および社会科学において、SSCI (Social Science Citation Index) や A&HCI (Arts and Humanities Citation Index) に依拠した研究評価制度が導入されて約10年が経過した時点でどのような問題が生じているのかを、主に高等教育の観点から論じた論考が収められている。指摘されている問題は、教育や社会サービスの軽視、数量的指標の偏重、発表形態における論文の重視と書籍の軽視、英語による発表の重視と中国語や他言語による発表の軽視、SSCI 収録誌への発表の重視と他の学術誌への発表の軽視などである。

キーワード：台湾、高等教育、研究評価制度、SSCI

はじめに

台湾では1990年代末から研究評価制度の整備が急速に進んだ。この研究評価制度ではトムソンロイター社(現在のクラリベイト・アナリティクス社)のScience Citation Index (SCI)、Social Science Citation Index (SSCI)、Arts and Humanities Citation Index (A-HCI)に収録されている学術誌に掲載された論文の本数が非常に重視されていた。それは台湾の学術界に多大なインパクトを与えることになった。特に社会科学と人文科学が受けた影響は大きく、研究評価制度の導入後、学術界では活発な議論が展開されるようになった。制度が始

まって間もない時期に刊行された『グローバリゼーションと知識生産——台湾における学術評価に対する省察——』（反思會議工作小組編 2005）には、社会科学と人文科学の多くの分野の研究者による研究評価制度に対する批判的な論考が収録されている。

研究評価制度をめぐる議論はその後も続き、現在に至っている。本章ではそのなかから代表的な成果として、『高等教育における SSCI シンドローム——ローカルあるいはグローバルな現象——』（Chu ed. 2014）を取り上げる。本書に収められた論考は、主として高等教育の観点から台湾の研究評価制度の作用を論じている。タイトルにあるとおり、議論の焦点は SSCI に置かれている。本書は基本的に批判的な立場に立ち、『グローバリゼーションと知識生産』の論調を継承しているといえる。『グローバリゼーションと知識生産』の刊行からおよそ十年の時間が経過し、そこでは予言的に指摘されていた研究評価制度の問題点が、『高等教育における SSCI シンドローム』では既に発生している現実として議論されていることは興味深い。

本章では続く第 1 節で『高等教育における SSCI シンドローム』の概要を説明した後、第 2 節において本書所収の各論考を要約する。第 3 節では研究評価制度を分析する枠組みの構築に向けて、第 2 節の要約から浮かび上がった問題点の整理をおこなう。

第 1 節 『高等教育における SSCI シンドローム』の概要

『高等教育における SSCI シンドローム』は、以下のように編者による序論と 9 つの論稿から構成されている。

Chuing Prudence Chou “Why the SSCI Syndrome is a Global Phenomenon?”（周祝瑛「何故、SSCI シンドロームはグローバルな現象なのか」）

Ka Ho Mok “Promoting the Global University in Taiwan: University Governance Reforms and Academic Reflections.”（莫家豪「台湾におけるグローバル大学の奨励——大学のガバナンス改革と学術的な影響——」）

Huei Huang Wang “The Political Economy of Quantitative Indexes for Measuring Academic Performance”（王輝煌「学術成果を測定する数量的指標の政治経済学」）

Jason Chih-yu Chan & Chia-Nian Lee “A Difficult Situation of Higher Education in Taiwan”（詹志禹・李嘉年「台湾における高等教育の困難な状況」）

Shao-Wen Su “To Be or Not to Be: Impacts of “I” Idolization from the Perspective of Humanities and Social Sciences Faculty in Taiwan”（蘇紹雯「生きるべきか死ぬべきか——人文および社会科学の教員たちからみた台湾における『I』の偶像化のインパクト——」）

Gregory S. Ching “ISI Perceptions and Hard Facts: An Empirical Study from Taiwan”（莊俊儒「ISI に対する認識と厳然たる事実——台湾における実証研究——」）

- (Kent) Sheng Yao Cheng, W. James Jacob & Shen-Keng Yang “Reflections from the Social Science Citation Index (SSCI) and Its Influence on Education Research in Taiwan” (鄭勝耀・ジェイムズ ジェイコブ・楊深坑「台湾における Social Science Citation Index (SSCI)の反響と教育研究への影響」)
- June Yichun Liu “Problems, Strategies, and Impact of SSCI Publication in English: Perceptions and Negotiations of Taiwanese Researchers” (劉怡君「英語による SSCI 収録誌での発表の課題、戦略、影響——台湾人研究者の認識と取り組み——」)
- Li-ying Wu & Alexandra Bristow “Peridhing Conficius: An Analysis of a Rupture Point in the Discourse of Taiwanese ‘New Higher Education’” (吳麗英・アレクサンドラ ブリストウ「消えゆく孔子——台湾の新しい高等教育の言説における破断点の分析——」)
- Chung Prudence Chou “Has Higher Education Lost Its Soul?” (周祝瑛「高等教育は魂を失ったのか」)

編者の周祝瑛はカリフォルニア大学ロサンゼルス校にて博士号を取得し、1999年から国立政治大学教育学系で教壇に立っている。『誰捉弄了台灣教改』(『誰が台湾の教育改革をもてあそんだのか』/新店 心理出版社 2003年)や *Taiwan Education at the Crossroad: When Globalization Meets Localization* (with Gregory S. Ching, New York: Palgrave Macmillan, 2012)といった著書がある¹。「反対獨尊 SSCI/SCI 等指標 找回大學求是精神」(「SSCI や SCI といった指標のみを重視することに反対し、大学の真理探究の精神を取り戻す」)を訴える署名活動では事務局を務めている²。

第2節 各論考の要約

1. 周祝瑛「何故、SSCI シンドロームはグローバルな現象なのか」

この論考は編者の前言(Editor's Preface)とされているが、通常のイントロダクションに相当する。5つの節から構成され、はじめの4つの節でグローバルな潮流と台湾で進行している事態の関係を論じ、最後の節で本書に収録された各論考を紹介している。

第1節「ローカルあるいはグローバルな現象なのか (A local or global phenomenon?)」では、まず1980年代に新自由主義イデオロギーが広まった結果、世界的に政府の役割が後退し、それは教育にも及んでいるとし、特に東アジアでは高等教育がグローバル化の影響を

¹ <http://www3.nccu.edu.tw/~iaezcpc/tw/#experience> 2018年3月6日アクセス。各著者のプロフィールは特に断りのないかぎり、『高等教育における SSCI シンドローム』の巻末の執筆者紹介に基づいている。

² <http://chiuphysics.cgu.edu.tw/yun-ju/CGUWeb/NCCUEdu2010/HomeCosignatory.htm> 2018年3月6日アクセス。

受け、大学改革が進行していると指摘する。改革の結果、大学間のグローバルなランキング競争が激しくなり、競争においては特定の学術誌、すなわちトムソンロイター社の引用データベースに収録されている学術誌に掲載された本数および引用件数が重視されると論じる。そして、台湾においても研究評価に基づいて研究費が配分されるようになり、研究評価においては SCI、SSCI、A&HCI 収録の学術誌に掲載された論文の本数が重要となっていることを明らかにする。

第 2 節「台湾における問題の起源 (Origin of the issue in Taiwan)」では、台湾においてどのようなプロセスをたどって現在に至ったかを提示する。台湾では 1980 年代後半から高等教育が急激に拡大した。これに対応するため、大学法の改正がおこなわれ、行政院教育改革審議委員会(Executive Yuan Education Reform Commission)が設置された。改革によって限られた教育予算は競争的に配分されることになった。周によれば、これが今日の問題の始まりである。

第 3 節「SSCI シンドロームのグローバルなジレンマ (The global dilemma of the SSCI syndrome)」では、再びグローバルな視点から SSCI シンドロームの問題点を次のように列挙する。

- 英語のヘゲモニーが持つ意味。
- 大学の役割における教育と研究の衝突。
- 研究業績を定義し、測定することの難しさ。
- 国際的な学術誌に重点を置く場合、研究の発表にはローカルな重要性を欠いてしまうという問題。
- 人文および社会科学において書籍を刊行する価値が見落とされること。

第 3 節ではこのような問題点を踏まえたうえで、何故、SSCI 現象がこのように広がっているのか、誰がこのシンドロームを引き起こしているのか、政府なのか、市場なのか、それともわたしたち学术界自身なのかという問題を提起する。

第 4 節「フェアプレイを実現するためのローカルな対応 (Local response for fair play)」では、まず台湾の特徴として、英語を母語としないこと、中国をはじめとする他のアジア諸国と違って諸資源が高等教育機関の間で平等に配分されてきたこと、高等教育機関の大部分が自律性と財政基盤を欠くことを示す。そして、このような特徴ゆえに、市場経済的な競争に対応して高等教育の再編がどのようにおこなわれたのか、母語を英語としない場合、21 世紀における高等教育のグローバル化とローカル化はどのように進むのかといったことを観察するのに、台湾は適していると主張する。周は 2010 年から始まったオンラインによる請願運動を、SSCI 等に依拠した研究評価制度の導入に対抗する具体的な行動のケースとして提示する。

第5節は前述のように各論考の概要である。

2. 莫家豪「台湾におけるグローバル大学の奨励——大学のガバナンス改革と学術的な影響——」

本稿の著者の莫家豪は本書の刊行時、香港教育学院（Hong Kong Institute of Education、現在の香港教育大学 Education University of Hong Kong）の副学長兼比較政策講座教授であった。現在は嶺南大学（Lingnan University）の副学長兼林文贇比較政策講座教授である³。

莫ははじめに、台湾政府は高等教育のガバナンスとマネジメントのスタイルをどのように改革してきたのか、高等教育のグローバルな競争力を高めるためにどのような戦略がとられてきたのかという問題を設定する。

莫によれば台湾において改革が始動するのは1994年からである。この年から各国立大学は毎年、予算を請求するのではなく、基金を設置して一定程度、自律的に運営できるようになった。また、政府の予算の一部は私立大学に回され、競争的に配分されることになった。政府の意図は、大学に自主性を与えるとともに相互の競争を促すことであった。

このような競争的な資金配分の仕組みはその後、世界の一流大学を生み出すために、さらに強化されることになった。教育部は1998年から⁴国家科学委員会（現在の科技部）とともに「学術的に卓越した大学を奨励するプログラム（Program for Promoting Academic Excellence of Universities/大學學術追求卓越發展計畫）」を実施し、2001年からは「大学の基礎教育を改善するプログラム（Program for Improving University Fundamental Education/提升大學基礎教育計畫）」を実施している。ともに競争的な資金配分の仕組みである。

このような大学のガバナンス改革は大学教員からはどのように受け止められているのか。莫は本稿の後半で、この問題についておこなったアンケート調査の結果を提示している。アンケート調査は150人の大学教員に対しておこなわれ、有効回答は113人から得られた。主な結果は次のとおりである。

改革に対する評価は概ね肯定的である。ただし、いずれも中立的回答ないし保留も多い。国立大学の改革の効果を認めた回答者はおよそ4割に達し、認めない回答者は1割弱にとどまった。国立大学の財政面の効果に対しては、肯定的回答が35%あったものの、少なからず否定的な回答もあった。一方、国立大学の効率面の効果については肯定的回答が7割に達した。国立大学の改革について支持するという回答が5割弱に達したのに対し、反対するという回答は2割に達しなかった。

研究の自律性については、改革によって機関の自律性は高まったことに同意する回答は

³ <https://www.ln.edu.hk/po/professor-joshua-mok-ka-ho> 2018年3月7日アクセス。

⁴ 教育部のウェブサイトによると、実施は2000年からである（<http://history.moe.gov.tw/policy.asp?id=6> 2018年3月8日アクセス）。

7割を超えた。一方、研究者個人の自律性については、高まったことに同意する回答が4割弱だったのに対し、同意しない回答は3割弱とかなり接近していた。説明責任が改善されたことを認める回答は7割に達した。一方、改革によって大学の運営が政治化したことを認める回答が否定する回答を顕著に上回った。教育部のコントロールが強すぎるという回答は、国立大学に関しては5割を超え、私立大学に関してはおよそ4割だった。

莫は以上の議論を、政府は規制を緩和しつつも、世界の一流大学を目標とした大学間の競争を促すことで、依然として大学を強くコントロールしている、その結果、大学教員は強いプレッシャーを感じているとまとめている。

莫のアンケート調査の結果は、大学教員の多くが大学の自律性が失われつつあると感じていることなどを明らかにしているが、総じてみると、本書の全体の論調と比べて、改革に対する肯定的な見方が多い。莫はアンケート調査の回答者の詳細を示していないものの、恐らく対象は人文および社会科学に限られていない。そのため、改革に対する批判が薄まった可能性がある。

3. 王輝煌「学術成果を測定する数量的指標の政治経済学」

本稿の著者の王輝煌は米シラキュース大学で公共行政学の学位を取得した後、台湾に戻り、1998年に東呉大学政治学系の副教授となって現在に至っている。王は本稿の冒頭で、研究評価の革新的な問題はピアレビューとビブリオメトリクスをいかに組み合わせるかであると指摘し、続いて何故、先進国ではピアレビューが中心であり、一方、台湾ではビブリオメトリクスに依存するののかという問題を提示する。本稿はこの問題の解明のため、アメリカ、日本、台湾の比較をおこなっている。

比較に先立って、数量的評価方法の長短が整理され、中核的な問題が提示されている。数量的評価方法の長所としては客観性、公正性、透明性、政治的な摩擦や介入の回避、そして低コストがあげられている。一方、短所としては研究の社会から乖離が指摘されている。王はこのような長短を踏まえて、中核的な問題として、何故、経営学、経済学、自然科学、工学ではSCIやSSCIといった指標に対して異議が少ないのか、何故、台湾の学術界の研究成果は先進国に及ばないのかといったふたつを提示している。

米日台の比較では、アメリカではピアレビューが評価の中心になっている理由として、何が研究上の貢献なのか、どのような研究課題が優先されるべきかについてコンセンサスを持つ専門家のコミュニティが形成されていることを指摘している。このようなコンセンサスがあるので、低コストでピアレビューをおこなうことが可能になるのである。日本ではアメリカと比べてより小規模で閉鎖的だが、学閥というコミュニティがあるため、低コストのピアレビューが可能になるとしている。

一方、台湾では学術界のグループは政治的に形成され、日米のような研究上のコンセンサスの形成がおこなわれていないという。このようにコンセンサスが欠如していることが、

台湾ではピアレビュー中心の評価をおこなえない原因であるというのが王の結論である。

王の議論で興味深いところは、数量的な評価方法に重点を置いた結果、ますますコンセンサスの形成が難しくなっているという指摘もおこなっていることである。つまり、学术界のコンセンサスの欠如が数量的な評価方法への依存をもたらし、数量的な評価方法への依存がコンセンサスの形成を妨げるという悪循環が生まれていることになる。このような視点は研究評価制度を論じる上で非常に参考になる。

4. 詹志禹・李嘉年「台湾における高等教育の困難な状況」

本稿の著者の1人である詹志禹はテキサス大学オースティン校で教育心理学の博士号を取得し、現在は国立政治大学教育学系の教授を務めている。本書の刊行時には教務長も兼任していた。また、附属小学校の校長を兼任していたこともある⁵。もう1人の著者の李嘉年はマレーシア工科大学を卒業後、科学の教師を志し、巫羅士打吉華独立中学(Keat Hwa High School)に勤めた。その後、台湾の国立政治大学教育学研究所に留学した。本書の刊行時にはペナン菩提独立中学(Phor Tay High School, Penang)に勤務していた。現在は国立政治大学の台湾実験教育推進中心(Taiwan Experimental Education Center)の研究アシスタントとなっている⁶。

詹と李は本稿の冒頭において、台湾の過去20年の高等教育政策が短期的であったと指摘し、本論ではそれをめぐる問題点を列挙していく。取り上げているのは数量化、ランキング、社会的格差、アメとムチといった論点である。

数量化については、詹と李はその限界を指摘している。彼らは一例として「学生の面倒をみる」ことをめぐる仮想の対話を提示し、それを数量的に測ることがいかに困難であるかを明らかにする。例えば、学校の運営に関わり、数量化を推し進めようとしているBが「週に3回、学生の面倒をみることを基準とする」と言うと、数量化に疑問を持つ教員のAは「何故、3回なのか」と訊き返す。Bはこれに対して「理論的な根拠はないが、上層部や投票によって決めることができる」と応える。それに対してAは、「それは恣意的だ。たとえ恣意的で不合理な基準を許容するとしても、それは回数でしかない。『面倒をみる』ことを定義していないし、数量化もしていない」とさらに疑問を投げかける。こういった対話が続けられていく。

教育部は2006年から「一流大学とトップレベルの研究センターを育成する計画(Plan to Develop First-class Universities and Top-level Research Centers/發展國際一流大學及頂尖研究中心計畫)」(2011年以降は「トップレベルの大学の育成に向けた計画(Stepping towards premier

⁵ http://edu.nccu.edu.tw/zh_tw/Faculty/%E8%A9%B9-%E5%BF%97%E7%A6%B9-90564321 2018年3月9日アクセス。

⁶ <https://teec.nccu.edu.tw/about2/3/1.htm> 2018年3月9日アクセス。

university plan/邁向頂尖大學計畫)」を進めている⁷。これはその名が示すとおり大学や研究機関のランキングを高めることを目標として、研究資金を競争的に配分する政策である。

詹と李はランキングについて、まず教員の評価制度において SSCI などに収録された学術誌に掲載された論文本数を重視する傾向は不可逆的に進行することを示す。第1に好むと好まざるとにかかわらず、業績リストに論文の掲載誌が SSCI 等に収録されていることを明記することが一般化する。第2に SSCI 等に基づく評価制度に賛成する教員も、反対する教員も、客観性を求めて数量的に業績を示そうとするようになる。第3にこの評価制度によって高い評価を得て、権力や権威を得た教員はこの評価制度をさら普及しようとする。

詹と李はさらに評価制度には種々の暗黙の基準が存在することを指摘する。例えば国家科学委員会の研究助成は、政府の産業関連の部局の研究助成よりも高く評価される。詹と李は、こういった評価制度は大学入試時の大学のランキングとも組み合わせられて、台湾の大学を単一の物差しで序列化すると論じる。

詹と李は続いて、競争的な研究資金の配分が教育および社会の格差を拡大していると指摘する。詹と李の議論に敷衍するならば、上位の大学には富裕な家庭出身の学生が多い。そこに傾斜的に資金を配分することは、富裕な家庭に対して資源を手厚く配分することになり、社会の格差を拡げることになると考えられる。

最後に詹と李は、各大学が現行の競争的な資金の配分に対応して導入している種々のアメとムチの問題点を3つ指摘している。第1にアメとムチは各教員の努力と能力が成果に直結すると想定しているが、研究は必ずしも公平におこなわれているわけではない。第2にアメとムチによってコントロールがおこなわれることになる。第3にアメとムチといった外発的な動機づけは内発的な動機づけを抑制し、教員としての活動を味気ないものにしてしまう。

詹と李が指摘した問題点はいずれも重要であるが、本稿は必ずしも実証的な分析をともなっているわけではない。本稿はむしろこれから検証されるべき課題を提示したと言える。

5. 蘇紹雯「生きるべきか死ぬべきか——人文および社会科学の教員たちからみた台湾における『I』の偶像化のインパクト——」

蘇紹雯はオーストラリアのニューキャッスル大学で教育学の博士号を取得し、本書の刊行時は国立勤益科技大学の応用英語系の副教授だった。現在は教授兼系主任である⁸。

本稿のタイトルにある「I」とは index の「I」であり、SCI、SSCI、A&HCI を意味している。人文および社会科学について論じているので、焦点は後二者である。

⁷ <https://depart.moe.edu.tw/ed2200/cp.aspx?n=B6999C1011992A87&s=ABBF62618F53F8DE> 2018年3月11日アクセス。

⁸ <http://ae.ncut.edu.tw/teacher/about/id/5> 2018年3月12日アクセス。

蘇は SSCI や A&HCI に依拠した評価制度に対する擁護と批判の議論をレビューし、それを踏まえて次のような 2 つのリサーチクエスチョンを設定する。

- 総合大学の人文および社会科学の教員は、SSCI や A&HCI 偏重のインパクトをどのように受けとめているのか。
- 総合大学の人文および社会科学の教員は、SSCI や A&HCI 収録誌の掲載本数に基づく高等教育の数量的な評価をどのように受けとめているのか。

蘇はリサーチクエスチョンの解明のため、インタビュー調査をおこなった。台湾の 68 の総合大学から 14 をランダムに選択し、そのなかから 20 人の人文及び社会科学の教員とインタビューをおこなった。インタビューによって明らかになった事実は次のとおりである。

- 13 人が自らの関心と学術誌の関心との不一致が SSCI 収録誌への掲載を難しくしていると回答している。つまり、台湾にとって重要と考えられるトピックについて研究しても、その成果が SSCI 収録誌に掲載される可能性は低い。
- 研究が SSCI や A&HCI の収録誌に掲載されやすいような分野に偏る。例えば研究者が少ない分野は引用件数が少数になるため不利になる。前述のように、ローカルな問題よりも国際的な問題の方が SSCI 収録誌に掲載されやすく有利である。
- 言語の壁がある。
- ローカルの学術誌の衰退を招くなど、英語を母語としない国は英語を母語とする国、特にアメリカの植民地にされる。
- 研究が過度に重視され、教育や社会サービスが疎かにされる。
- 研究のリソースが公正に配分されない。

蘇がインタビューから引き出した SSCI や A&HCI に依拠した研究評価制度の問題点は、必ずしも目新しくはない。しかし、蘇が提示した多くの大学教員の生の声によって、この問題を強く実感することができる。

6. 莊俊儒「ISI に対する認識と厳然たる事実——台湾における実証研究——」

莊俊儒は国立政治大学で教育学の博士号を取得し⁹、輔仁大学教育領導與發展研究所で助理教授をつとめている。莊は本章において、SSCI など ISI の引用データベースに収録された学術誌への掲載本数に依拠した研究評価制度に関する認識と事実について、アンケート調査による実証分析をおこなっている。アンケート調査では回答者の基本的な情報のほ

⁹ <http://www.lead.fju.edu.tw/staff/007.htm> 2018 年 3 月 12 日アクセス。

か、データベースに関する知識、使い方、然るべきと考える役割、研究成果の発表に対する意見を尋ねている。層化抽出法によって 300 人の教員と学生のサンプルを選び、電子メールを送って、95 人から回答を得た。明らかになった点は以下のとおりである。

- 学生と教員の間で研究発表の媒体の重要性に関する認識に違いはない。
- SSCI などに収録された学術誌は TSSCI¹⁰など収録された学術誌よりも重視されている。
- 文系、理系とも SSCI などに収録された学術誌への発表や TSSCI などに収録された学術誌への発表を重視している。
- ISI のデータベースの用途として最も多いのは重要な文献の確認。次に多いのは学術誌のパフォーマンスすなわちインパクトファクターの確認。
- 最もよく使われているデータベースは Google scholar。SSCI、SCI および TSSCI も 7 割前後の回答者が使っている。
- 英語はグローバルな学術言語であるとする見方は強い。しかし、英語を母語としない場合、自国語での発表が奨励されるべきだという考え方も一定程度ある。
- ISI のデータベースが研究方向性（研究課題の選択）に影響を与えているという見方は強い。
- ISI に依拠した現行の研究評価制度は合理的ではないという考え方は強い。
- 現在の台湾の学術界においては SSCI などに収録された学術誌への発表が重要であるという見方はとても強い。

荘は結論として、ISI データベースは台湾の学術界に既にしっかりと根付いている、その作用には功罪両面あるとしている。また、ISI データベースのヘゲモニーに対するバランスーとして、Google scholar やオープンアクセス・ジャーナルの可能性にも言及している。

本稿によって台湾で一般的に考えられていることが実証的に裏付けられた。また、アンケート調査の結果には、前述以外にも興味深い事実が含まれている。例えば SSCI 収録誌への掲載本数が重要と考えられていることは既に述べたとおりだが、その反面、掲載誌のインパクトファクターや論文の被引用件数はあまり重要だとは考えられていない。しかしながら、掲載本数よりも被引用件数が重視されるべきだという考え方は強いのである。

7. 鄭勝耀・ジェイムズ ジェイコブ・楊深坑「台湾における Social Science Citation Index (SSCI) の反響と教育研究への影響」

本稿の著者のうち鄭勝耀はカリフォルニア大学ロサンゼルス校にて比較教育学の博士

¹⁰ Taiwan Social Science Citation Index。台湾の学術誌について SSCI を模してつくられた。Taiwan Science Citation Index (TSCI)、Taiwan Humanities Citation Index (THCI)もある。

号を取得し、2004年、国立中正大学課程研究所および師資育成中心の助理教授となり、2008年、副教授、2012年、教授に昇格し現在に至っている¹¹。ジェイムズ ジェイコブはカリフォルニア大学ロサンゼルス校で教育学の博士号を取得し、本書の刊行時はピッツバーグ大学の教育学部准教授兼国際教育学研究所所長だった。2017年からはメンフィス大学教育学部リーダーシップ学科の教授兼学科長に就いている¹²。楊深坑は本書の刊行時、国立台湾師範大学教育学系の主任だった。現在は名誉教授となっている¹³。

鄭らは本稿において、台湾の教育における SSCI のインパクトを明らかにするため、教育学における国際学術誌への発表の動向の分析と、SSCI 収録誌に掲載された論文の台湾の教育への影響の検討をおこなっている。研究方法はフェルナンデス=カノとブエノの 2002 年論文に基づいている。第 1 に専門家のグループの議論に基づいて、教育学における 110 の SSCI 収録誌と 32 の非 SSCI 収録誌を選ぶ。第 2 に各誌について、台湾の研究者による主観的な評価、インパクトファクター、TSSCI から算出したビブリオメトリックスの 3 つのデータを集める。これを合成した指標をつくり、各誌をランク付けする。主観的な評価のため、研究者に対してアンケート調査をおこなっている。812 のアンケート票を郵送し、183 人から回答を得ている。

ランキングによって 110 の SSCI 収録誌は次のように 4 層に分類された。第 1 層は 3 誌、第 2 層は 27 誌、第 3 層は 39 誌、第 4 層は 41 誌だった。鄭らは非 SSCI 収録誌を 3 層に分類しているが、分類したのは 32 誌のうち 7 誌のみである。何故、7 誌のみなのかは不明である。鄭らの重要な発見は、TSSCI 収録誌に 61 件と 30 件、引用されている非 SSCI 収録誌があることを示したことである。この 2 誌は SSCI に収録されていないにもかかわらず、台湾の教育学に重要な影響を与えていると言える。

本稿は極めて実証的な論文である。SSCI に対する批判の 1 つとして、SSCI には重要な学術誌が必ずしも含まれていないという指摘があったが、本稿はそれを検証している。

8. 劉怡君「英語による SSCI 収録誌での発表の課題、戦略、影響——台湾人研究者の認識と取り組み——」

劉怡君は米パデュー大学で英語学の博士号を取得し、本書の刊行時は国立政治大学外文中心の副教授をつとめていた。現在は同大学英国語文学系の副教授である¹⁴。

本稿は台湾人研究者が SSCI 収録誌に研究成果を発表しようとするときに直面する英語というハードルについて検討している。単に言語上の困難を論じるのではなく、言語がそれをを用いる集団に共有されている知識と深く結び付いていることに注目している。

¹¹ <https://resttc.ccu.edu.tw/cte/kentcheng/kent.htm> 2018年3月12日アクセス。

¹² <https://iise.pitt.edu/profile/w-james-jacob/> 2018年3月12日アクセス。

¹³ <http://www.ed.ntnu.edu.tw/members/bio.php?PID=15> 2018年3月12日アクセス。

¹⁴ <http://english.nccu.edu.tw/people/bio.php?PID=11233> 2018年3月18日アクセス。

劉は丁寧なレビューの後、以下のような3つのリサーチクエスチョンを設定する。

- 研究成果の発表における台湾人研究者の課題は何か。
- 台湾人研究者がこれらの課題に対して、どのような戦略で取り組んでいるのか。
- SSCI 収録誌での発表が台湾人研究者とその置かれた環境にどのような影響を与えたのか。

劉の基本的な方法はインタビューである。劉はまず第1のリサーチクエスチョンを解明するため、インタビューの受け手がこれまで SSCI 収録誌に投稿した際に受け取った査読者からのコメントを分析する。次にインタビューによって、第2と第3のリサーチクエスチョンの答を探索する。インタビューの受け手は5人である。2人は経験豊富な研究者、1人は中堅の研究者、2人は駆け出しの研究者である。

劉は SSCI 誌への投稿に対するコメントを13のカテゴリーに分類し、さらにそれを執筆の技術、コミュニティの知識、領域の知識、表現能力の4つの大分類にまとめる。その結果、主な発見として次の4点を提示している。

- 経験豊富な研究者は言語に関してはポジティブなコメントを受け取るか、特にコメントは受け取っていないかのどちらかである。一方、中堅や駆け出しの研究者は言語に関して多くのコメントを受け取っている。
- いずれも領域の知識に関してネガティブなコメントを受け取っている。
- 経験豊富な研究者も、駆け出しの研究者も、投稿した学術誌が適当ではないというコメントを受けている。
- 経験豊富な研究者も駆け出しの研究者と同様に、方法と結論以外の箇所に対して、編集者からネガティブなコメントを受けている。

これらのファインディングとインタビューの結果を踏まえた劉の分析は次のとおりである。

第1のリサーチクエスチョンすなわち課題に関しては、第1に台湾人研究者のコミュニティの知識の欠如が浮かび上がる。特にコミュニティの外部からは知ることのできない知識が多く、台湾人研究者はそれを知り得ない。その結果、投稿する学術誌の選択を誤ることになる。また、海外の読者の関心に結びつけることができない。

第2に、領域の知識の不足はコミュニティの知識や表現能力の不足と連動している。例えば台湾人研究者と査読者の間で用語の意味が異なっていたり、既存研究に対する理解が異なっていたりする。また、台湾人研究者は領域の知識が不足しているため、査読者のコメントを十分に理解できない場合がある。

第3に、表現能力に関しては、多くの台湾人研究者が明解さに欠けるというコメントを受け取っている。また、冗長である、繰り返しになっている、誇張しすぎである、単純化しすぎであるといったコメントも共通している。これらに対する台湾人研究者の対応は——第2のリサーチクエストに対する回答——査読者の意図を理解するため、繰り返しコメントを読むことである。

劉はこれらの課題の根本には学術的なリテラシーがあると考えている。そして、それは周辺にいて学習することはできないとしている。

劉は SSCI 収録誌での発表がもたらす影響——第3のリサーチクエストに対する回答——として、インタビューに基づいて次の4点を指摘する。第1は研究の SSCI 偏重、つまり SSCI 収録誌に掲載されやすい研究に偏り、それ以外の研究が排除されることである。第2は研究の英語化である。その結果、自国語による研究は周縁化され、研究の多様性は低下する。第3はローカルな学術誌の衰退である。第4は研究の過度の重視である。また、共同研究の成果を各研究者の業績としてどのように配分するかをめぐって細かいルールが設定され、その結果、研究者間の協力が難しくなっていることも示されている。

本稿は本書のなかでも特に優れた論稿であり、SSCI シンドロームの核心に迫っている。すなわち、SSCI 収録誌はグローバルな研究発表の場として位置づけられながら、実際には各学術誌の背景にある社会の知識と深く結び付き、その外にいる研究者が参入することが困難になっている。本稿はそれを英語に着目して鮮やかに解き明かしている。

9. 呉麗英・アレクサンドラ ブリストウ「消えゆく孔子——台湾の新しい高等教育の言説における破断点の分析——」

本稿の著者のうち、呉麗英は英ランカスター大学で言語学の博士号を取得し、2008年から文藻外語大学英文系の助理教授となっている¹⁵。もう1人の著者であるアレクサンドラ ブリストウは英ランカスター大学で学位を取得し、本書刊行時は英サリー大学ビジネススクールの組織行動の講師をしていた。現在は英オープン大学ビジネススクールの人と組織の講師である¹⁶。

呉とブリストウは「新しい高等教育(new higher education)」の「発表なくば去れ(publish or perish)」文化と、それから生まれた台湾における SSCI 偏重に対して、孔子の言説と実践によって対抗できないかというユニークな発想を提示する。呉とブリストウのいう孔子の言説と実践とは教育の重視である。呉とブリストウは本稿において、2010年9月28日の教師節に起きた事件を題材に取り上げ、自らの発想の現実性を検討している。

教師節は教員の社会的な貢献を称え、感謝を表す日である（ただし、近年は休日にはな

¹⁵ <http://c021.wzu.edu.tw/datas/upload/files/%E8%80%81%E5%B8%AB/97071.pdf> 2018年3月13日アクセス。

¹⁶ <http://www.open.ac.uk/people/ab36678> 2018年3月13日アクセス。

いっていない)。9月28日が教師節になっているのは、孔子が生まれた日とされているからである。多くの学校で優れた教員の表彰がおこなわれる。

2010年の教師節に国立政治大学でも優秀な教員を表彰する式典がおこなわれていた。しかし、表彰される教師の1人だった政治学系の郭立民は、論文を発表していないことを理由に雇用契約の更新がされないことになっていた。郭はこれに抗議するメッセージを書いたベストを着て式典に臨んだのである。

この事件の後、台湾では高等教育における教育と研究について議論が巻き起こった。研究の業績がないことを理由に優れた教員を解雇することの是非が議論されたのである。郭はそのなかで現代の孔子と見なされた。マスメディアは郭に対して好意的だった。学生会も郭を支持した。しかし、結局、事態を変えるまでには至らなかった。

呉とブリストウはこの事件に対する見方を、他大学の2人の経営学の教員にインタビューしている。そこで明らかになったことは、現行のSSCIシンジロームに嫌悪感を持ちながらも、それに対して個々に抗うことへの無力感である。呉とブリストウは結論において、新しい高等教育に対抗するためには国際的なネットワークを構築する必要があると訴えている。

SSCIシンジロームと孔子を対置させるという発想は些か突飛で奇異にもみえる。しかしながら、そうであっても、代替案を提示することによって新しいアイデアが生まれる可能性を示したとも考えられる。

10. 周祝瑛「高等教育は魂を失ったのか」

編者による最終章である。必ずしも本書のまとめがおこなわれたり、結論が示されたりしているわけではなく、2003年に教育部がSSCI、SCIおよびEngineering Index (EI)に依拠した研究評価制度を導入して以降のプロセスが改めて提示されている。

最後の節では周らがおこなった請願活動が紹介されている。それは以下のような5項目を訴えている¹⁷。

- SSCIを研究評価や資金配分の最良の方法として用いるのをやめよ。
- 人文および社会科学における学術研究の多様性を認めよ。
- ローカルな見方と各分野の特徴を認めるような学校の分類制度を構築せよ。
- 社会的な責任や学術的な専門性を内包した文化を育てよ。
- 文化を踏まえた人文および社会科学の評価基準を作成せよ。

¹⁷ 中国語版は http://chiuphysics.cgu.edu.tw/yun-ju/CGUWeb/NCCUEdu2010/%E6%89%BE%E5%9B%9E%E5%A4%A7%E5%AD%B8%E7%B2%BE%E7%A5%9E_%E9%80%A3%E7%BD%B2%E6%9B%B8_20101129_updatedV2.pdf 2018年3月13日アクセス。

第3節 研究評価制度の論点

最後に以上のような『高等教育におけるSSCI シンドローム』のレビューを踏まえ、研究評価制度を検討する論点を整理してみたい。周が前言で提示したポイントと重なるが、構造化しつつ拡充する。

まず、評価そのものの是非を問うことも考えられる。いかなる評価も副作用をとまなう。一方、大学の教員や研究者の多くは評価されようがされまいが、進んで役割を果たす。実際、台湾では、そして日本でも、現行の評価制度が導入されるまで、大学の教員や研究者は非常に緩やかに管理されていた。しかし、このような主張は現在、ほとんど受け入れられることはないだろう。ただし、何故、現行の研究評価制度が導入されることになったのかは見定めておく必要がある。

評価自体を排除できないとすれば、どのような評価制度が望ましいのかが問われる。大学の教員の場合、研究のほか、教育や社会サービスといった役割がある。大学の運営という仕事もある。評価制度ではこの間のバランスを考えなければならない。本書で繰り返し指摘されていたのは、現在の台湾の評価制度が研究に偏っていることである。

その上でどのような研究の評価制度が望ましいのかが検討されなくてはならない。まず、考慮すべきはピアレビューと数量的指標のバランスである。本書では台湾の研究評価制度では数量的指標の比重が大きすぎるとみている。

数量的指標も一定程度、用いる場合、どのような数量的指標が望ましいのかが考えられなくてはならない。本書ではこれに関して、台湾の研究評価制度が持つ複数の問題点を指摘している。

第1に論文のみを対象としていることである。一方、書籍の刊行が軽視されている。

第2に英語による発表が重視されていることである。その反面、中国語や他の言語での発表が軽視される。また、これは単に用いる言語の問題ではない。英語を用いることは海外の読者をターゲットにすることであり、その関心に一定程度、寄り添わなければならない。その結果、台湾への関心が薄れることになる。

第3にSSCI収録誌に掲載された論文が過度に重視されていることである。SSCIは必ずしも各分野の重要な学術誌をすべて収録しているとはかぎらない。

これらが研究評価制度を論じるポイントとなる。そして、何故、そうなのか、もし本書が示したような批判を受け、それにもかかわらず変わろうとしなければ、それは何故なのかといった問題に接近していく必要がある。

【参考文献】

(中国語)

反思會議工作小組編 2005『全球化與知識生產——反思台灣學術評鑑——』台北 台灣社會
研究季刊社。

(英語)

Chou, Chuing Prudence ed. 2014 *SCI Syndrome in Higher Education: A Local or Global
Phenomenon*. Rotterdam, Boston, Taipei: Sense Publishers.